米芾書史所載王羲之帖考（続）

中田勇次郎

前号において、宋の米芾のあらわした書史のなかから、王羲之帖をとり出して解読と注釈をこころみたが、紙幅の都合で全部にわたることができなかった。本号では前号に引きつづいて王羲之帖について、前号と同様の方法によって注解をこころみ、併せてその子王献之の法帖に及んだ。書史のなかの二王に関する法帖は、ほぼこれによって取り上げることができた。

黄麻紙十余帖

濮州（山東）の李丞相（李迪）の家には、書画が多い。その孫の直秘閣李孝広が、右軍（王羲之）の黄麻紙十余帖を収蔵している。十余帖が一様につらなって巻をなしている。その書は老熟して逸気があり、羲之の暮年の書である。ここにその数帖の辞句を略記する。その一帖に「白石枕殊佳物。深感君至」といい、また一帖に「卿事時了。甚快。羣凶日多云々。此使鄴下一日為戦場。極令人惆悵。豈復有慶年之楽耶。思卿一面無縁。可歎可歎」という。また一帖に「九日以当力見」という。また一帖に「重熙八日過信安」という。また一帖に「祠物当治護。信到便遣來忽忽善錯也」という。また一帖に「謝書云云今送」という。また一帖に「鶻等不佳。令人弊見此輩、吾衰老。不復堪此」という。このほかの帖は記さないで省略しておく。この帖の後には先君（米芾の父）の名印がある。下の一印の印文に「尊徳楽道」とある。今、この印は現に私の家にある。先君はかつて濮州に任官していたとき、李柬之少師（李柬之は李廸の子）と、碁うちの友人であった。おそらく碁を奕ってこれに勝って手に入れたものであろう。そのとき私はまだ生れていなかった。この帖一巻は、世上にこれに比べられるものを見ない。もとより右軍の名札である。

注　李丞相は李廸をさす。字は復古。資政殿大学士同平章事となった。宋史巻三一〇に伝記がある。（九七一―一〇四七）。その子、李柬之、字は公明。英宗、神宗朝に仕え、太子太保となって致仕し、ついで少師をおくられている。同じく宋史李廸伝に付録されている。

ここに掲げた七帖のうち、鶻等帖は、宋拓宝晋斎法帖、宝賢堂帖、墨池堂選帖などに刻されている。釈文では、各本とも「令人」の上に「都」字が多い。重編本の宝晋斎帖には、末尾に「耳」字が多いのは原帖三行におそらく他帖の「耳」字を取って加えたものであろう。墨池堂選帖本は宝晋斎本に依ったもので、のちに宋人曹士冕（陶斎）の跋語がある。

貞観御府右軍三帖

欧陽詢の草書「也」字は、末筆がさかしまになっている。この筆法は何から出たのわからない。余の家に貞観御府右軍三帖がある。末後の一帖の「也」字は、欧法の出るところである。世上に伝わる真迹および石刻帖には、みなこの「也」字はない。

注　貞観御府の右軍帖には、褚遂良の王羲之書目がある。米芾の所蔵していたのは何の帖か明らかではないが、あるいはこの目録中のものかもしれない。「也」字の筆法については、欧陽詢に草書千字文の墨帖があるが、今見る本は、「也」字が虫損しているため筆法を確かめることができない。戯鴻堂帖に収めた史事帖の一つに度尚帖があり、この帖の末尾の「也」字は、末筆が逆の筆法になっている。米芾のいう「末筆倒磨」というのは、あるいはこのような筆法をいうのではないか。

碧　牋　王　帖

劉瑗（伯玉）が碧牋の王帖を収蔵している。帖の上には「勾徳元図書記」「保合大和印」および、顕徳の歳の題記がある。劉氏はかつて余の家の顧愷之の浄名天女図を愛し、この画と王帖とを交換しょうといった。私は、もし子敬帖（王献之の法帖）があるならば交換してもよいと答えた。伯玉はその返事に、「これは沙を披（かきわ）けて金を揀（えら）ぶようなものです」といった。このことばはたいそうおもしろい。

私は白首（老年）になって、晋人の帖を収蔵しょうとつとめたが、ただ手に入れたのは、謝安帖（八月五日帖）一つだけである。これは開元、建中の御府に所蔵されていたもので、かって唐の王涯の家に所蔵されていたことがある。つぎに右軍の二帖、これには貞観御府の印がある。子敬の一帖には、褚遂良の題字と印記がある。また、丞相王鐸家の印記がある。このほかに顧愷之の浄名天女図と戴逵の観音図がある。そこで私の居るところを宝晋斎と名ずけた。

注　劉瑗、字は伯玉、開封の人。晋唐以来の書画を収蔵し、鑑識に秀でた。「勾徳元図書記」は勾中正の鑑蔵印である。勾中正の伝記は宋史巻四四一に見える。字は坦然、宋太宗の朝に仕えて、著作佐郎、直史館となる。文字の学に精しく、徐鉉とともに説文を校定している。米芾は、勾徳元は中正のことで、史字に通ずと云っている。徳元というのは字であろう。この印記は書史に収められた李邕帖にも用いられている。「保合大和印」は未詳。易経乾卦に「各正性命保合太和乃利貞」とあり、易経に基ずくことばであろう。「顕徳」は五代後周世宗朝の年号。（九五四―九五九）。

謝安帖は八月五日帖をいう。宋拓宝晋斎法帖に米芾の刻帖がある。開元建中御府の物と言うのは、この帖に「開元」の小璽があり、建中御府の「翰林之印」が用いられているからである。唐の宰相王涯の家に入ったことは、この帖に王涯の鑑蔵印「永存珍秘」が捺されているからである。

貞観の印のある右軍二帖は、官舎、尚書二帖のことであろう。（後述参照）

子敬一帖は十二月帖をいう。宋拓宝晋斎法帖に刻されている。褚遂良の「大令十二月帖」の題簽と「褚氏」の印記がある。また宰相王鐸の「鐸書」の印がある。顧愷之と戴逵のことは歴代名画記に見える。顧に浄名居士維摩詰図や天女図のあったことはこれによって知られる。戴は仏画をよくしたので観音図もあったであろうが、これらの画は現存するかどうか明らかではない。

官　奴　帖

劉涇が宿州（安徽）にあって、平生はじめて白麻紙に臨した顔真卿書、太冲序を収得した。これこそかれの秘笈第一の物である。潤州へいって封敖の行書李文饒太尉の告、許渾の詩を収得し、ついで智永の板本千文を手に入れた。そののち余の家の十七帖、日本の書および日本の告、呉融、司空図が聳光に贈った歌、張顛、聳光、亜栖等の書、韓幹の馬、戴嵩の牛図を手に入れた。また、楊傑のところで、貞観御府の内史（王羲之）の官奴帖を手に入れた。余は十七帖以下の諸物と交換して、これ（官奴帖）が私の家に帰した。

注　劉涇、字は巨済、陽安（四川）の人。宋史巻四四三に伝記がある。米芾とは親交があった。太冲序は顔真卿の送劉太冲序をいう。忠義堂帖、戯鴻堂帖などに収められている。書史には別に碧牋に書した一本を著録している。封敖は唐人、字は碩夫、官は尚書右僕射に至った。旧唐書巻一六八、新唐書巻一七七に伝記がある。許渾は唐の詩人。字は用晦、丹陽の人。呉融は唐の詩人、字は子華。新唐書巻二〇三

文芸伝に伝記がある。呉融に贈謦光上人草書歌があり、宋の陳思の書苑菁華に収められている。司空図も唐の詩人。司空図にもおなじく送草書僧謦光帰越詩があり、また書苑菁華に載っている。張顚は張旭をいう。謦光、亜栖ともに草書で知られる。韓幹は画馬の名手、戴嵩はもっぱら水牛をよくしたので名高い。ともに歴代名画記に見える。

尚　書　帖

余はさきに唐垌のところで、交換して右軍の尚書帖を手に入れた。何でもかれが僧清道から手に入れたということである。これにも「貞観」の印がある。印文は（もと貞観二字が離れていたのを）ふたたび合している。それにはもと截断した紙の痕が一すじのこっている。もとは一つのものであったのである。林希が余の家のこの軸（尚書帖）を見て、嗟歎してこう言った。「秘府にあるところのものは、これ以上に出ないようである。希（私）はかつて秘閣の中のある一巻を見たことがあるが、それには「貞観」二字の印文が、五寸（唐尺）ばかりはなれていて、つずいていない。もし真物の印ならば、印は四枚もちいても、四枚ともみな平均する（同じ調子のものになる）はずはない。もし偽刻の印ならば、かならずただ一鈕だけ作って用いるので、どれもこれもみな一律である」と言った。余はこれを聞いてたいそう腹を立てた。ひろげて見る気にもなれないほど不服であった。しかし、こころみにこれをよくしらべて見ると、左右上下、一つとして同一のものがないことがわかった。そこでさっそく乗物の輿を用意させて、林氏のところへゆき、このわけを話すると、公は、なるほどとうなずいて、「君のこの書はますます絶妙である」といった。この公（林希）の思慮の精しいことはこのとおりである。

注　唐垌は、唐詢の子、無錫の人。すでに前に見えている。この条はやや難解である。「貞観」二字の鑑蔵印のことは、歴代名画記巻三、叙古今公私印記に記されている。「貞」「観」それぞれ一字ずつ二小印に作られている。この印は紙縫の上に用いられる。真印はその二枚の印がそれぞれ異なるが、偽印はただ一鈕の印を用いるだけであるから、一律になるという意味ではなかろうかとおもう。この項は尚書帖の「貞観」印ははじめ偽刻ではないかと疑ったが、そうでないことがわかったよろこびを記しているのであろう。

尚書帖は、楊傑から入手したものがあることは別記のとおりであるが、これと同一帖かどうか明らかではない。東書堂帖に「見尚書書一一云々」草書六行の一帖がある。また、「尚書六日書示」帖もある。ところが、宝真斎法書賛巻七に、右軍尚書帖、草書四行、「尚書六日。書示。秀才孔君。借戦国策可付之」をのせている。その解説に、唐人摹本、絹本真蹟一巻。宝晋書史を引いて、かつて、唐垌のところ

で交換してこの帖を手に入れたもので、僧清道から手に入れたという。「貞観」の印があり、もとの截断した紙の痕一すじが残っている。今、これは縑素であり、裂けて手に触れることもできないが、おそらく晋代のものではないであろう。また、貞観の遺蹟もないので、鑑定して唐摹とした。帖の首尾に宣和御府のすべて六印があり、また、内府図書璽一顆がある。宝慶乙酉正月、予は遣閑をえて、大名（河北）から帰り、真廟の宸輪とともにたずさえてきた。みな汴都の旧蔵品である、という。

宝晋英光集巻八に、「枢密林文節観吾家右軍書。歎息久之。一日云。貞観印、閣下有一軸、相去五六寸。乃是両枚。亦有相合者。不相当也。余聞之。内愠不敢発。視者月余。一旦忘之。既開皆不相当。忽悟文節語。即馳告公曰、使君愈重宝也」とある。

これもこの書史の記事と関連する跋語である。林希、字は子中、福州の人。謚は文節。宋史巻三四三に伝記がある。

官舎帖については、右軍書記一三九に「官舎佳也」帖がある。また、同一七二に「想官舎無善」帖がある。また、同二五六に「官舎佳也節気不適可憂」帖がある。どの帖にあたるか未だ明らかではない。

汪氏珊瑚網巻二十二、米襄陽鑒収法書にも次のような記事がある。同じく関連のある記述である。

晋将軍会稽内史金紫光禄大夫王羲之、字逸少、官舎、尚書二帖、第一帖、易于今坊州使君劉涇、第二帖、易于礼部員外郎楊傑、唐貞観御府物、至予家、貞観二小璽復合。神物雑合。真有数耶。自丙寅、至壬午、十七年間、以紙毛三洗跋。時崇寧紀元五月十五日。

右　軍　帖

余は、張直清の家の虞永興（世南）、汝南公主墓誌を臨した。浙中の好事者は、これを真物として石に刻した。右軍帖はとりわけ多い。

注　汝南公主墓誌は書史の中に別に見えるので、後に詳述する。「右軍帖尤多」というのは前後の文意がつづき難く、脱文があるのはないか。

唐人背右軍帖

唐人が王羲之の帖を表背するには、みな、硬熟した、綿のように軟かい紙を用い、古紙を損傷しないようにする。また、水の中に入れて蕩滌（あらいすすぎ）して古紙を曬すと、糜れない性質をもたせることができる。というのは、紙はもと水をもちいて製造したものであるから、もう一度、紙を抄くようにするとよいのである。余は古い書蹟をうるたびに、よい紙二枚を用い、その一枚は書蹟の上におき、一枚は書蹟の下に

しく。傍らから皁角の汁をこまかく沪過して、水をまぜ、ざっとその液をそそぎかけ、紙の内部へはいるようにする。上をおおうた紙の上から、手先でやわらかくおさえこすりかけると、垢や膩気がすっかり水とともに出てしまう。表と裏とこのようにし、ついで清水を五七遍そそぐ。紙も墨ももとのままで変ることなく、塵垢はみなとり去られる。ふたたび上におおうた紙をとり去り、乾いたよい紙でこの濕気をすいとらせる。二三枚の紙でこれをやる。うらうちの紙がすでにはなれてしまったら、原本を半ば潤ったよい紙の上に合せて、背表の紙をめくりとり、糊をつけて背表をする。絹で四辺をおさえてはならないただ紙を用い、うらうちの紙に摺ができて、重弸（紙がひっぱれてひずむことであろう）し、古蹟の紙を損めないようにする。かえって襯帖（ぴったりとくっつける）して古蹟の紙に背してはならない。隠うにしたがってすぐに破れる。もっぱら薄紙を用いるがよい。帖の寸法と上部をそろえて、たがいに古い損傷した部分を修補するようにすればとりわけよい。損傷したところをわざわざ貼りつけ補くる必要はない。（うらうちの際は原本の破損した部分を、別に紙をあてたりしないで、うらうちの紙のままでうまく補修することをいうのであろう）。

右軍唐摹四帖

王羲之の唐摹四帖のうち、一帖に「裏鮓」という字がある。薛道祖（紹彭）の収蔵していたもので、裏鮓帖と名ずける。（四帖のうち）、二幅は冷金硬黄紙で、一幅は楮薄紙の摹本である。これはいわゆる右軍暮年の更に妙なる帖である。その一幅に、「欲与彦仁集界上。平自可。且何所諮人。乃王道平平」という。この「平」字は音便という。また、晋人の語気を見ることができる。上に弘文印（「弘文之印」であろう）がある。印は帖の中心の面上にあり、紙縫に印していない。四辺にまた小さい「開元」の字の印がある。御府の帖である。

注　裏鮓帖は、今、宋拓宝晋斎法帖および二王帖に見られる。明の集帖にも収められている。帖のうちに「弘文之印」があり、「紹彭」、「崇嗣」の署名がある。ただし「開元」の小璽はない。帖後に薛紹彭の賛を刻している。賛に「右軍為書、暮年更妙。裏鮓既出。衆帖咸少。蓋其暮年。縦心所造。開元珍蔵。洪文秘奥。崇嗣与欽。鑒賞同好。龍鳳騰儀。日星垂曜。陳雷不嗣。隠如霧豹。清閟于帰。是則是傚。河東、薛紹彭以晋王逸少裏鮓帖刻石題」とある。王の書は暮年のものが勝っていることは虞龢の論書表に見え、孫過庭の書譜などにも末年の書は多妙と言っている。薛紹彭は、字は道祖。長安の人。米芾と親交があり、米薛と並称された。書は二王の筆意を得て、絶妙の域に達したといわれる。今、その尺牘などが伝わっている。また、好んで蘭亭序の臨書をなしたのでも名高い。宋史巻三二八、父の薛尚伝に附

記した伝記がある。崇嗣は徐崇嗣をいう。画家で名高い徐熙の孫にあたり、祖風を承けて花鳥画を善くした。画法における没骨法の始として知られる。裏鮓帖については小著中国書論集所載、宋拓宝晋斎法帖鑑賞記に詳説したのでここでは省略する。

唐開元摹右軍帖

宋子房が唐開元摹右軍帖を手に入れた。末尾に李林甫等臣の跋がある。今、王詵に帰している。翰林の印はみなある。このうち異熱帖は薛紹彭に帰した。

注　宋子房は伝記未詳。王詵は、字は晋卿、蜀国長公主を尚し、官は留後（節度使の代行をする官名）に至った。詩をよくし画をも善くした。宋史巻二五五王凱伝に附記した伝記がある。翰林印は「翰林之印」であろう。宋拓宝晋斎法帖所載の謝安帖に見える。建中御府の印という。

右軍与王述書

蘇耆の書画紀に述べている。鳳師とともに賞閲すること数日におよんだ。そのとき見たものに、内史（王羲之）が王述に与えた書がある。その文に、「此郡之弊、不謂頓至於(于)此。諸逋滞。非復一条。独坐不知何以為治。自非常才所済。吾無故捨(舎)逸而就(能)労。歎恨無所復及尒(耳)。交(夏)人事請託。亦（所）未見。北(小)都冀得小差。頃日当何理」。この帖は江南十八家帖中にある。本朝において、碑本をもって十巻中に刻入した。これを比較してみるに、毫髪も差(ちが)っていない。

注　蘇耆、字は国老、蘇易簡の子である。宋史巻二六六蘇易簡伝に見える。「蘇耆書画記述」とあるのは、蘇耆に書画紀という著述があって、その中に述べているということであろう。蘇耆は宋史巻二六六、東都事略巻三五、宋史翼巻二等に見える。書画の収蔵家として知られた蘇氏一門の人で、その子に蘇舜元、舜欽、舜賓兄弟がある。蘇耆に書画記という著述があるかどうか未詳。鳳師は未詳。かつて講読した時、僧鳳山、諱子儀、姓陳氏、天竺山にありとある。なお未考。「内史与王述書」は此郡帖とよばれるもので、淳化閣帖中に刻されている。十巻中に刻入というのは閣帖に刻されることをいう。今の閣帖とは文字に小異がある。閣帖の釈文では捨を舎に作り、就を能に作り、尒を耳に作り、交を夏に作り、北を小に作る。書史の釈文にも意味の通ずるところがあり、参考することができる。捨逸而就労などは書史の方がよく、交人は教人の意ではないか。魯一同の王右軍年譜では、此郡帖を永和七年、四十五歳、護軍将軍から右軍将軍会稽内史と

なった年に置いている。会稽郡の凶作のときにあたってこの郡の内史となったが、自分の力の及ばないことを歎いてしたためた書簡と思われる。文意は「この郡の疲弊したことが、これほどにまで至っているとはおもいもかけなかった。いろいろな逋滞（逋は逃亡の意、逋滞は行政のうまくゆかないことをいうであろう）は、一条にとどまらない。ただひとり坐して、どのようにして治めたらよいのかわからない。この状態は、おのずから普通の才能では救済できるものではない。私は理由もないのに、安逸な生活を捨ててこの労に就くことになった（会稽内史になったこと）。また私の力では及ばないことを歎くばかりである。」という。以下の文は存問に関することらしいが、具体的な内容は不明である。江南十八家帖は、米芾の見た刻帖で王羲之の此郡帖はこの中の一帖であるが、全帖の詳細は不明である。墨池編明刊本巻五に、晋十八家法帖があり、「右は世に十八帖として伝わっているが、実は二十五帖ある。それは書者が十八家あるという意味で名づけられているのである。世間にはまた王羲之十八帖というものもある。しかしこれはみな官法帖から出たものである。この十八家の書は官法帖のとりわけすぐれたものである」という。（王羲之を中心とする法帖の研究一二七頁）

増慨・安西帖

また二帖は「増慨」「安西」というのがこれである。上に「筆精墨妙」印と蘇耆の題字二字がある。余は王詵からこれを文皇手詔と交換して手に入れた。文皇詔は宋素臣（宋白）尚書の家のもので、余はこの書蹟に次のような賛を跋した。

龍彩鳳英。天開日升。亟戡多難。力致太平。雲章毎発。目動神驚。

注　二帖というのは二つの帖の意で、「増慨」と「安西」をさすらしい。この二帖がつずいて一巻となっているものであろう。淳化閣帖巻八、採菊帖の後半は一に増慨帖といい「増慨知足下疾患小佳」云々とある。安西帖は、おなじく閣帖巻八に、「一昨得安西六日書」云々の帖が二種ある。字句は類似しているが別帖になっている。あるいはこれをさすのではないか。なお未詳である。「筆精墨妙」印は王略帖にあり、蘇易簡の用いた印という。蘇耆は易簡の子で前にも見えている。文皇手詔は唐太宗の手書した詔勅で、このことは宝晋英光集巻六にも同様に賛を掲げている。宋素臣は名は白。字は太素。官は吏部尚書となった。宋史巻四三九に伝記がある。

唐人摹右軍丙舍帖

唐人の摹した右軍の丙舍帖は、暮年の書である。呂文靖丞相の家の淑問の処にある。法書要録に載せている。鍾繇帖を臨したものである。薛

紹彭は二本を模写し、その一つを私に贈ってくれた。

注　丙舍帖は墓田丙舍帖のことであろう。今、鍾繇の書と伝えるものがある。この帖は明の集帖、墨池堂選帖、快雪堂帖等に刻されている。この記事によるとこの帖は王羲之が鍾繇帖を臨したものである。文は次の如くである。

墓田丙舍。欲使一孫於城西。一孫於都尉府。此繇家之嫡正之良者也。兄弟共哀異之。哀懐傷切。都尉文僖自取禍痛。賢兄慈篤。情無有已。一門同恤。助以悽愴。如何如何。

呂文靖は呂夷簡をいう。字は坦夫、寿州の人。仁宗朝に同平章事となった。謚は文靖と称する。宋史巻三一一に伝記がある。淑問は人名であろうが、誰をさすか未考。法書要録は巻三、褚遂良の王羲之書目の正書の部に。「墓田丙舍伝行」と見える。行数は今本と一致する。

銭氏王帖

薛（紹彭）からの書簡が来て、銭氏の王帖を買うことができましたと言ってきた。私はその返事に、李公麟の家に蔵する二王より以前の帖のことを書いて、財布をかたむけて買い取るのがよろしいと言って、次のような詩を寄せた。

欧惟褚妍不自持。猶能半蹈古人規。公権醜筆惑札祖。従茲古法蕩無遺。張顛与柳頗同罪。鼓吹俗子一起乱離。懐素獨療小解事。僅趨平淡如盲医。可憐智永硯穿臼。去本一歩已千嗤。（原注法帖所載可見）。已云此生為此困。有口能談手不随。誰云心存乃筆到。天工自是秘精微。二王之前有高古。有志欲購忘高貴。殷勤分治薛紹彭。散金購取重跋題。

注　この詩は宝晋英光集巻三に載っている。ただし、この前に「老来書興独未忘」から「刮不東来従此荒」の二十四句がある。この二十四句は書史では、別にこの項の前項の中に記されている。集とは文字に小異がある。天工を集では天公に作るが天工の方が正しい。分治を集では分貽に作るが分貽の方が意が通ずる。

この詩は米芾の書論をうかがうのによい。唐の欧陽詢と褚遂良は、欧は怪、褚は妍とそれぞれ特色はあるが、まだよく古人の規矩を蹈まえている。柳公権の書は醜怪であり、悪札の元祖である。このち古法はすっかりのこらなくなった。張旭は柳公権とほとんど同罪といってよい。世俗の人をあふりたてて書法を乱した。懐素は獨療（北人が南人をののしることば）ではあるが、すこしはものがわかるが、わずかに平淡に趨くが、盲医のごときものがある。米芾は平淡自然を書の極意としているが、懐素はわずかに平淡をえているものの、盲医（事

理に明らかでない医者）のようなもので、まだよくわかっていない。智永は書の学習に苦心してつとめているが、その根本（二王）からはもう一歩というところである。法帖（閣帖）に載せている例を見ればわかる。この生（智永）はこのことで苦労をしている。口では議論することができても、手が言うことをきかない。心存すれば筆到る（柳公権の心正ければ筆正しを暗示している）。天然の工みはおのずから奥ふかく微妙なものである。二王の前に高古な書がある。自分はそれを学びたいとは思っている。価が高くても惜しくはない。薛紹彭にも分ちおくりたいので、大金を散じて買いとり、重ねて跋をかきつける、という。

薛紹彭の唱和した詩に、

聖草神蹤手自持。心潜二模範一識二前規一。惜哉法書垂レ世久。妙帖堂々或見レ遺。宝章大軸首尾具。破レ古欺レ世完使レ離。当時鑒目独子著。有レ如二痼病工難レ医。至レ今所レ収上巻五。流伝未レ免二識者嗤一。世間無レ論レ有二晋魏一。幾人解二得真唐隋一。文皇鑒定号レ得レ士。河南精識能窮レ微。即今未二必無二褚獠一。寧馨動欲二千金貲一。古囊織褾可二復得一。白玉為レ蹤黄金題レ

という。

注　寧馨は世説新語に用いられていることば。寧は如此かくの如しの意。馨は語助詞である。

羲　之　千　文

右、楮紙。書字は筆力が円熟している。宣州観察支使王仲詵のところにある。王仲詵は故の宰相珪の姪にあたる。謬って「賀知章書」の四字を題している。韻字の下のところはあやまっている。

注　王仲詵は王珪の姪。王珪は、字は禹玉、哲宗朝に尚書左僕射兼門下侍郎となった。宋史巻三一二に伝記がある。（一〇一九―一〇八九）。「于韻字下非也」は未詳。この項は宝章待訪録に見える。

子　鸞　字　帖

このころ、劉涇は世上に晋帖が伝わっているということを信じていなかった。そののち十五年たって、かれははじめて子鸞字帖を手に入れて、これを王羲之の帖であると言った。余は、おそらく陳子鸞のものではないかと言った。ただし、私はまだこれを見ていなかった。のち、薛紹彭が書簡をよこして、こんどは六朝の書であると言った。

また、劉涇は梁武帝の像を手に入れたということを報らせてきた。余はときに漣漪に赴任していた。かれに返事の詩をおくった。

劉郎収レ画早甚卑。折枝花草首ニ徐熙一。十年之後始聞レ道。取ニ吾韓戴一為ニ神奇一。邇来白首進ニ道奥一。学者信有ニ髄与レ皮。始知下十篋但遮レ壁。牛馬祗可レ裹ニ弊帷一。峩々太平老寺主。白紗冒レ首無ニ冠蒞一。武士後列粛ニ大劍一。宮女房侍(傍)顰ニ脩眉一。神清眸子知ニ寡欲一。歯露脣反法ニ定饑一。世人覩ニ服似ニ摩詰一。不レ識六朝居士衣。僧繇勿輒乱唐突。梁時筆法了可レ知。道子見レ之必再拝。曹盧何物望ニ藩籬一。本当第一品天下。却縁ニ顧筆一在ニ漣漪一。

劉君は画を収蔵することにかけては、以前からあまり上手ではなかった。折技とか花草などは徐熙を第一としていた。十年ののち、はじめて画のほんとうの道がわかるようになり、私の韓幹（馬の画の名家）や戴嵩（牛の画の名家）を見て神奇とするようになった。それ以来、老年になって、いよいよ道の奥儀にすすむようになった。画を学ぶには髄と皮とがある。そこで、十篋（英光集は十襲に作る。衣類のこと）の衣はただ壁を遮るばかり、牛馬（の画）はただ弊帷を裹むことができるだけであることがわかる。峩々たる太平老寺主（梁武帝をいうであろう）、白紗もて首を冒い、冠蒞（冠とそのかざり）はない。武士がうしろにならび、大きい剣をうやうやしくささげている。宮女は傍らに侍り、長い眉を顰めている。神清の眸子に、欲の寡ないことがわかる。あらわな歯なみ、そり反った脣は定饑（？）に法る。世人は服が摩詰（維摩詰）に似ているのを覩るが、六朝居士の衣を識らないのである。僧繇（張僧繇）が……（この句は英光集では後人毋把乱唐突に作る。よいかげんにぶつつけに描いてはならないの意であろう。僧繇は後人とする方が通じやすい）。これで梁代の筆法がよくわかる。道子（呉道子）もこれを見たら、きっと再拝するにちがいないし、曹弗興や盧楞伽もこれを藩籬として望むことであろう。本来天下第一品のもの、それが顧愷之の筆という理由によって、漣漪（江蘇）に在ることとなった。

劉君は右軍の子鸞帖を収得したので、賛を作って私に寄せてきた。その大略に、

「執ニ黒帝矩一、作ニ黒風雨一。大一尺許、星五十五」という。奇文である。

時に君は虢州の官をやめて、まだ別の除命を受けていなかったので、余はたわむれにこれに答えて、

「清明に郡（郡の長官を退くこと）を去れば、則ち郡（郡に任官すること）を得るであろう。安(いずく)んぞ作業を用(も)って洗業を解かんや」（仕事をすることで仕事をやめることはわからないの意か）といってこれにたわむれた。

薛紹彭は私と書画の趣味が同じであったから、あるとき私に書簡をよせて、「書画においてはこのごろ久しいあいだ薛米ということを聞いたことがない」と言った。余は詩をつくってこれに答えた。「世言米薛或薛米。猶言弟兄与兄弟。四海論年我不卑。品定多知定如是」と。

劉涇が薛紹彭のところへゆき、書を見て大声をあげて、書来云々といった。余は詩をつくってこれに答えた。「唐満書奩晋不収。却縁自不信双眸。発狂為報豢龍子。不怕人称米薛劉」と。

劉君は古くから晋帖を収蔵していない。晋帖には真物がないからという。そしてただ唐帖ばかり収蔵している。それゆえにこの句があるのである。

注　世言米薛或薛米詩は宝晋英光集巻三に見える。唐満書奩晋不収詩は宝晋英光集巻五に見える。豢龍子は官名から来たことばで批評家をさす。

黒帝は五天帝の一、白青黄赤各帝とあわせて五帝となる。北方の神の名。

浩　博　帖

銭氏の収蔵するところは浩博である。帖にいう、「臣節分厳。外無典掌之所。故不簿上」と。しかし諸位にはみな法書があり。臨搨が甚だ多い。常州使君。景湛の房下には、往々にして人のために購い去られている。

注　この条は銭氏に王帖のあることを言うているらしいが、なお明らかではない。浩博は帖名とは解しにくい。銭景湛（景諶）、銭惟演の従子、宋史巻三一七に伝記がある。

官　奴　帖

待訪録に、右双鈎麻紙本、亦、王仲修のところにある、という。

注　前出の玉潤帖は官奴ではじまるので官奴帖とよばれる。書史では玉潤帖をかかげ、別にまた官奴帖を出しているので、この二帖は別のものらしい。官奴の字のある帖は他にもあるので、これがどの官奴帖にあたるかはにわかに断定しにくい。右軍書記一七六「延期官奴小女」（褚目五五にも見える）、がある。このほかにも官奴帖がなかったとは言えない。

右軍与王述書

余はまた右軍が王述に与えた書を唐文皇手詔と交換した。手詔は棗花（紋様であろう）の黄綾をもちいて詔の背表をした。原本の表面の上には一斉に花紋が隠起（紋様がかたおしをしたように紙面にあらわれることであろう）した。余はついで重ねてうらうちするのに台州産の黄蘗藤紙をもちい、砧熟（紙を砧ってやわらかくする）し、一半を掲げて（めくりあげること）背表した。滑らかで浄く、軟熟し、紙を巻いたりのばしたりしても毛を生じない。余の家の書帖は多くこの紙を用いている。一つ一つ自分で背表し、自分で表装して、笈に入れて保存している。古くうらうちのうまくできているものは、そのままにして、めくらないようにする。乾いた紙がよごれたときは、表面を上むきにし、一枚の新しい紙をあて、四辺をのりずけにして卓の上にはりつける。帖の上には糊をつけてはならない。新しい紙は中を空虚にしておさえるようにする。上にあてた紙が乾くと、下もおのずから乾いてくる。金漆の卓の上に紙面をあててはならないことが肝要である。めくりあげるときにかならず原本に墨のよごれができる。

注　原文虚弼はさきに「摺背重弼」の語があった。紙を原本にあてるとき、紙と紙の中間に空気がはいってふくれることをいうのであろう。「内史与王述書」は前出の此郡帖をいう。

王献之帖

十二月帖

晋の太宰中書令（官名）の王献之、字は子敬の十二月帖は、黄麻紙にかかれている。文に、「十二月割至否、中秋不復不得、想未復還、慟理為即甚、省如何、然勝人何慶等慶等大軍」とある。下の一印に「鐸書」とあるのは、唐の宰相王鐸の印である。後に「君倩」二字がある。前に絹地の小帖（題簽をいう）があるのは、緒遂良が題したもので、「大令十二月帖」とある。この帖の筆の運びかたは、火筋で灰の上に文字を書いたかのようで、文字と文字が連綿して端がない。意を経ずして書かれたもののようである。いわゆる一筆書である。天下子敬の第一帖である。もと快雪帖（快雪時晴帖）とつずいていた。蘇太簡（蘇易簡）の家の所蔵品である。上に国老（蘇耆、易簡の子）、才翁（蘇舜元、耆の子）、子美（蘇舜欽、舜元の弟）の題跋がある。そのことばに、鹵僧守一の蔵する所なり。先令（易簡をさすであろう）、命服を以って之を得たり」と

ある。子美の子、激、字は志東という。余とこれを分蔵し、書画宝玩をもって交換した。

注　十二月帖の米芾の刻帖は、宋拓宝晋斎法帖の巻首に、王畧帖、謝安帖の二帖とともに収められている。小著、宋拓宝晋斎法帖鑑賞記参照。

送　梨　帖

王献之の送梨帖に「今送梨三百顆。晩雪殊不能佳」という。上に梨幹黎氏の印がある。いわゆる南方の君子なるものである。跋尾の半幅に「因太宗書巻首。見此両行十字。遂連此巻末。若下珠還二合浦一、剣入中延平上。太和三年三月十日。司封員外郎。柳公権記」とある。のちに細字で一行を題して「又一帖、十二字、をこれに連ねる」という。余の弁別したのによるとこの十二字は王右軍の書である。本文には「思言敍卒何期。但有二長歎一。念告」とある。柳公権は誤って子敬の書とした。紙縫に「貞観」の半印がある。世南（虞世南）、孝先（王曽）の跋がある。孝先は本朝（宋）の王曽丞相の字（あざな）である。劉季孫が一千緡をもって買いとった。余は欧陽詢の真蹟二帖と王維の雪図六幅、正透犀帯一条。硯山一枚、玉座珊瑚一枝と交換した。（送梨帖、言敍帖と太宗帖と交換）。劉はこれを認めた。王詵は余の硯山を借りて、すぐには返さなかった。劉氏が沢州の太守（山西）となり、赴任して二日たって、王詵ははじめて硯山を返した。そしてもう一度交換したいことを約束した。ところが劉が死んでしまった。その子が二十千（二萬銭）で王防に売りわたした。

唐太宗の書はどことなく王献之に似ている。公権は太宗の書巻からよく見分けをしてとり出したのであるが、また、誤って右軍帖（言叙帖）を連ねて、子敬とした。公権は書のわかるものであるのにこのような始末である。これは、馮氏（京）の西昇経は唐の経生の書であるのに、これを褚（遂良）の書というのと同じである。おもうに書を能くするものは、書をよく鑒定するものとは限らない。余はすでにこれに跋して鑑定をなした。

蘇子瞻（軾）はそこで詩を跋してこう言った。

「家雞野鶩同登レ俎。春蚓秋蛇総入レ奩。君家両行十二字。気圧二鄴侯一三萬籤」。と。

晋史（晋書）の唐太宗の賛は（王羲之伝の賛）は子敬（王献之）を貶（けな）している。しかし、唐太宗は力めて右軍を学び、また虞（世南）の行書を学ぶに至りえなかった。上、右軍に登りつこうとしたので、大いに子敬をののしったのである。かれの書は天真超逸であり、どうして父の及

ぶところであろうか。

注　宝章待訪録に、王献之送梨帖には黎氏の印があり、柳公権の跋につらなっている。王右軍の言叙帖二行には貞観の半印がある。徐僧権の字がある。

右、左蔵庫副使劉季孫のところにある。柳公権の跋によると、唐太宗の書の前に、献之の書が雑って出ている。そこでその父（王羲之）の書をば献之帖のあとにはりつけて、又一帖と言っている。柳のような専門家でも、父の王羲之の書を子の王献之のものと誤っている。まして書を知らないものが誤を犯すのはなほさらのことである、という。

送梨帖は今、宝晋斎法帖、東書堂帖、戲鴻堂帖、三希堂法帖などに刻されている。「今（送）梨三百晩雪殊不能佳」とあって、送字は欠損し、「顆」字はなく、草書十二行である。書史にも両行十字とある。「黎氏」の印記は、歴代名画記の古今公私印記に、「故御史大夫黎幹印」とあり「黎氏」の印を載せているのに相当するであろう。黎幹は戎州（四川）の人。玄宗に仕え待詔翰林から諫議大夫に至り、徳宗朝に至り宦官劉忠翼と陰謀して罪に陥り死を賜った。唐書巻一一八、新唐書巻二一七上に伝記がある。

「南方君子」は中庸に「南方之強也、君子居之」に基づくであろう。後にある細題一行は、集帖にはない。

言叙帖は二王帖、東書堂帖、宝晋斎法帖にあり、草書二行、跋と印は今は失われている。

王曽、字は孝先、益都の人、仁宗朝に中書侍郎、同中書門下平章事となった。謚文正。（九七八―一〇三八）。宋史巻三一〇に伝記がある。王維雪図のことは書史にも別に見える。夢渓筆談にも王維図のことが記されている。

西昇経のことは、待訪録に「老子西昇経楮遂良書閻立本画、右在観文殿学士洛陽馮京処」とある。馮京は、字は当世、鄂州江夏の人。（一〇二一―一〇九四）。宋史巻三一七に伝記がある。蘇東坡の絶句は東坡集に見える。家雞野鶩は家鶏は王僧虔の論書に、晋の庾翼が自分の書を卑下していったことば。春蚓秋蛇は晋書王羲之伝賛に見えることば。両行十二字は送梨帖として三希堂法帖の釈文にも、送梨帖の題詩としている。ただし、十二字は十一字に作っている。鄴侯は唐の李泌、字長源をいう。京兆の人。（七二二―七八九）。新唐書巻一三九、旧唐書巻一〇三に伝記がある。蔵書の多いことで知られた。韓退之に「送諸葛覚往随州読書」詩があり。「鄴侯家多書、挿架三万軸」の句がある。李泌の子、李繁が随州の刺史をしていたとき諸葛覚がそこへ往くのを送る詩である。東坡の絶句は東坡集巻一八、「書劉景文所蔵

王子敬帖絶句」と題する詩である。両行十二字はそのままである。

范新婦唐摹帖

余は子敬の范新婦唐摹帖を収蔵している。この帖は蘇激の家から手に入れたものである。帖の後に倩仲の跋がある。余は詩を題してこう言った。

「貞観欵書丈二紙。不レ許三兒奇専二父(婦)美一。何為寥寥宝是似。遭レ乱真(婦真)帰二火与レ水。千年誰人能継レ跡。不二自名家一殊未智。嗟尓方来眼須レ洗。玉蹤金題半帰レ米」。

又和して、

「雲物龍蛇森動レ紙。父子王家真済レ美。張翼小兒寧近似。滄溟浩対二蹄(蹠)跨水一。騰蛇無レ足鼯(蜈)多レ跡。以レ仮易レ真信用レ智。亀澼雖レ多手屢洗。巻不レ生レ毛誰似レ米」と云う。

又和して、

「直裂紋匀真古紙。跋印多時俗眼美。誠懸尚復誤疑似。有二渭方(不)レ能レ弁二涇水一。真偽頭面拳跌趾。久仮二中分一弁二愚智一。宝軸時(開時)開心一洗。百代何人伝至レ米」という。

黄庭堅がこれに和して後に題した。その詩に、

「王令遺墨方尺紙。尾題倩仲実子美。百家蔵本略相似。如二日行レ天見二諸水一。拙者縮鈎輒斬レ趾。田恒取レ斉并二聖智一。錦囊昏花百過洗。湖海濯纓人姓米」という。

蔣之奇は一韻にて和するもの三首、呂升卿は和すること二首。林希は和すること三首。劉涇は和すること二首。余章は和すること一首。余のちに二首、また再和したものをあわせて一軸とした。林子虚が借りて行ったまま、まだ返しにこない。

注　この詩三首は、宝晋英光集巻三に「題唐模子敬范新婦帖子三首」と題して載っている。文字に小異がある。王献之の范新婦帖のことは今なお未詳である。王羲之に謝范新婦帖があり、褚遂良の王羲之書目四九、右軍書記三六〇に見え、緯帖に刻され、宋拓宝晋斎法帖に、蘇家伝来の印記のあるものが刻され、鈞清館法帖にも絳帖から模刻されている。六行、行草体である。米芾のいう子敬の范新婦帖は蘇激

（蘇舜欽の子）から手に入れているから、これがあるいは上記の王羲之の書のものと同一のものかもしれないがなお不明である。

臨大令法帖一巻

余は大令の法帖一巻を臨した。その臨帖が常州士人の家にあったとき、誰かがこれを廃帖にしてしまった。それを裝背（表具）して沈括に与えた。ある日、林希が章惇、張詢および余を甘露寺の浄名斎に集会させた。そのときおのおのが書画を出して見せた。ところがこの臨帖が出されたので私はたいそうおどろいて、「これは私の書です」と言ったが、沈括はむっと怒って、「この帖は某家に長らく収蔵されていたものです。あなたの書であろうはずはありません」と言った。私は笑っていった。「主が変って、真物かどうか認められないということがあるものですか」と。

注　沈括、字は存中、湖州銭塘の人。（一〇二九―一〇九三）宋史巻三三一附遺伝。

林希、字は子中、福州の人。紹聖のころに章惇に推薦されて中書舎人となり、神宗実録の編集にあずかった。元祐の群臣をしりぞけるにあたってその相談に参加した人物である。甘露寺は江蘇鎮江県北固山上にある名刹。三国呉のときに建立されている。

刻子敬帖

関景輝の家の刻石の子敬帖は「節過触事云々」は、たいそうすぐれためずらしいものである。真迹が越州石元之大夫の家にあるという。今、その子、県尉のところにある。

注　待訪録には「晋中令王献之已復此節帖、石は朝請大夫新昌の石元之の家にある。関景仁がしばしば見ている。かつて石に模刻した。私は両本を見たことがある。字札は精妙であった」、という、類似の記事であり、字句がことなるので同一帖とは見なされない。閣帖に、節過歳終云々の帖があり、字句が近いが別帖と見られる。

臨鵞群帖

王詵は、余が都下に到って、その邸宅に招かれるたびごとに、たくさん書帖を出して、余に臨学することをすすめた。そのようにして、書櫃の中から書画をさぐり出し、余の臨した王子敬の鵞群帖を、染めて古色の麻紙とし、一面に皺紋をつくり出し、錦嚢にいれ玉軸をつけ、他の書の上の跋を剪りとってその後につけ加えた。また。虞世南の書を臨した帖を、古色に染めて表装し、公卿に跋をかかせた。余はたまたまこれを

見て大笑いした。王詵は手あたり次第に、これを奪ってゆく。このほかにもまだたくさんこんなものがあるが、まだ出して見せないだけである。